

PSYCHO—PASS 2219

凡人 軍人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2019年、日本でサイボーグ技術の一般市民への普及から十年がたった。

公安局刑事課一係に配属された新人、尾沢 那奈は、配属早々厄介な事件に巻き込まれるも、何とか西ノ宮監視官や執行官達と共に解決し、彼らと共に働いていくこととなった。

しかしそんな時、国会議事堂のモニターがハッキングされ、グロテスクな画像が流れるという事件が発生。

最初は愉快犯による犯罪として捜査を進めていく彼らだったが――

目次

キレイだったヒト【上】	1
キレイだったヒト【下】	5

## キレイだったヒト【上】

『——えー、全身サイボーグ技術が国民に普及してから、十年がたちました。……しかし、残念ながらサイボーグ化によって、犯罪係数を意図的に操作可能であるという噂が皆様の間で流れているとき聞きました。そのような噂は事実無根です！シヴユラシステムはサイボーグであろうと非サイボーグであろうと、公平に裁くシステムであることを、ここに宣言いたします！』

\*\*\*

『サイボーグ化したやつで潜在犯落ちした奴はこれまでに前例がないらしい。』

『そりやまだ普及してから十年しかたつてねーからじゃね？そろそろ一人くらい出るでしょ？』

『にしても出なさすぎだろ。非サイボーグ民は一年間で結構摘発されるじゃん。』

『まずサイボーグ民と非サイボーグ民の比率考えてみるよ。普及したつつつても手術だけで200万、さらにサイボーグ関連機材で毎年50万はかかるんだろ？俺らには手の届かない代物だろ。』

『現市川内閣の大臣は全員がサイボーグ、そしてあいつらは今まで色相が少しでも濁ったことが一度もない。』

『それってどこ情報？マジだったらヤバくね!？』

『それサイボーグと関係あるん？』

『ちなみに農林相の林美智子は学生時代に潜在犯落ちしかけた前科アリ。あとサイボーグ化する前は色相の変化半端ないって言われてたらしい。』

『だからそれどこ情報かはつきり言えよ……』

『とりまシヴユラはクソ。あれで幸せだって感じてる奴は洗脳されてる。』

『あと、これは噂でしかないが、サイボーグの中にはパラライザーとエリミネーターが効かない奴があるらしい。……まあ、都市伝説並の噂だな。』

\*\*\*\*\*

『サイボーグ技術の普及によって、人類は決して朽ちることのない肉体を手に入れ、ついに死というものから解放されました。』

『サイボーグ技術とシヴユラシステムによってより快適で、安心して暮らせる社会を作りましょう！』

\*\*\*\*\*

【PM 08:00 東京】

夜、まばらではあるが、自動車が走っている環状道路の上を、サイレンを鳴らしながら二台の車両とドローンが物凄い速度で走り抜けた。

車両はパトカーと、そして、執行官を輸送するための大型輸送車であった。

「西ノ宮さん、この事件、どう思います？」

「どう思うもなにも、ただの気の狂ったやつとしか思えんだろ。それ以外に何かあるのか？」

「いえ……そういう訳では……」

「なら取り敢えず行くしかないだろ。エリアストレスだってハンパじゃない。レベル4警報が発令されてる。」

パトカーの中で、二人の監視官が話し合っていた。

一人はかなり若い女性で、もう一人は先程西ノ宮と呼ばれた、30台であろう男性だった。

彼らは三十分前、ショッピングモールでナイフを持って暴れている人間がいるとの通報を受け、現場に急行しているところだった。

「尾沢監視官、配属から一ヶ月もたつてないのに、こんな事件が発生して、困惑している気持ちは分かる。だが、君はただ執行官に指示を出してやればいい。いつもと同じだ。そう、考え込むな。」

「は……はい……」

『監視官、お話し中のところ悪いけど、ちよつといい？』

助手席にあるモニターに、女性の顔が映し出された。

女性は二十台後半であろうか、かなり化粧が濃い印象であった。

「大丈夫だ分析官。話してくれ。」

『犯人の身元が判明したわ。名前は島原 安彦年齢は28。シヴユラの職業診断で大手製薬メーカーへの適正を認められ入社。しかし、今から一ヶ月前に色相の悪化という理由でクビになって以来、家に引きこもっていたらしいわ。』

「……なるほどな。犯行の動機はシヴユラの診断への怒り、そこから色相が濁らない人への妬みに繋がった……ってどこか。」

西ノ宮は考え込みながら言った。

『あと、例のショッピングモールだけど、かなりヤバいわね。外からは完全に封鎖してるけど、中にいる逃げ遅れた人達、精神的にかなりキてるわ。エリアストレス値が上昇し続けてる。』

「それはマズいな……。尾沢！あとどれくらいで着く？」

「……はっ、はい！えーつと……もうすぐです！あと五分もしないで着きます。」

「分かった。到着次第すぐに出るぞ。速やかに犯人を確保する！」

「……り、了解！執行官にもそう伝えます。」

そこから少し市街地を走り、車両は一つの大型ショッピングモールの前で停車した。

ショッピングモールは普段の賑やかさとは異なり、周りには公安局のドローンが配置されていた。

そして、西ノ宮と尾沢がパトカーから降りると、後方に停車していた輸送車の後部……その重苦しそうなハッチが、ロックを解除され、ゆっくりと開いた。

ハッチが開ききると、中から四人のスーツを着た男女が降りてきた。

一人はボサボサの長い茶髪と隈のある目をした男性、そして、それと対照的に短く刈り上げた黒髪と鋭い目付きが特徴的な男性であった。

残りの二人は、ショートカットの赤い髪と優しそうな丸い目の女性と、背中の真ん中辺りまで伸びた金髪と鋭く、青い目をした女性であった。

そして彼らこそ、執行官である。

彼らは潜在犯でありながら公安局に所属し、武器を持って同じ潜在犯を狩ることで社会貢献を為す……そのため彼らは人々から、猟犬と呼ばれ恐れられていた。

全員が集まると、西ノ宮は言った。

「全員集まったな！状況に関しては分かっていると思う。現在、このショッピングモールはこの時代に似合わぬ卑劣な犯罪者によって占拠されている。当然、中には善良な一般市民が犯人に怯えながら中に留まらされ続けている。彼らを一刻も早く解放するため、犯人にドミネーターの裁きを食らわせてやれ！」

西ノ宮は強く、そう言ってから、少し間を置いて、つづけて言った。「ただし……もしも、彼らの中に犯罪係数が規定値を越えたものがあった場合は……容赦なく、それを撃て。」

そう西ノ宮が言い終えると、彼の近くに黒い大型のケースがやってきた（車輪がついたケースのため、正確には走ってきた、の方が正しいが）。

ケースは彼の前で止まると、自動で開いた。

そしてその中から出てきたモノこそが、監視官と執行官にのみ持つことが許された銃、『ドミネーター』である。

携帯型心理診断鎮圧執行システム、通称『ドミネーター』

銃を向けた対象の犯罪係数を観測し、潜在犯であれば無力化、時にはその命さえも奪う。

潜在犯にのみ有効な、最強の矛である。

西ノ宮がケースからドミネーターを取ると、それに続くように、尾沢、そして、執行官の面々がドミネーターを取っていった。

「二手に別れて行くぞ。中里、三島は俺に付いてこい。門倉、笹木は尾沢に付いていけ。しっかりと新人のフォロワーをしてやれよ。」

「了解。」

「さあ、行くぞ——！」

## キレイだったヒト【下】

【PM08:20 東京 ショッピングモール内】

『ようこそ、イオーショッピングモールへ。こちらは、日用品関連売り場です。』

緊迫した状況に似合わぬ明るい声で接客ドローンが尾沢らを迎えた。

「ここ一階は見る限りでは何か事件が起こったかのような変化は見受けられなかった。」

「北上分析官、犯人の現在位置は分かりますか？」

『ちよつと待ってね……あー、見つけたわ。五階服飾関連売り場に、異様にエリアストレスが高い場所があるわ。恐らくそこで人質を連れて立て籠っているのかも。マップに情報を送ったから、確認してみて。』

分析官から送られてきた情報を確認してみると、ショッピングモール五階フロアにエリアストレスの極度の上昇を示す赤い円が表示されていた。

しかしこれでは、犯人のいる位置が正確に掴めたとは言い難かった。

「もつと正確な場所はわからないんですか？」

『ムリね。五階のカメラとセンサー類が軒並み破壊されているから、外部からのスキャン以外では探すことができないの。』

「……っ、分かりました。西ノ宮さん、私たちはこれから五階に向かい、犯人を確保します。」

『分かった。なら俺は中里、三島と逃げ遅れた一般人の避難指示にあたる。……犯人は人質を連れている可能性がある。十分に、注意してくれ。』

「分かりました。門倉さん、笹木さん。私たちはこれから五階に向かいます。到着後は、警戒を怠らないように。あと、犯人をなるべく刺激しないようにしてください。」

「了解。」



二人を連れ、尾沢はエレベーターへと乗り込んだ。  
五階へ向かう間、エレベーターの中には沈黙が訪れていた。  
その中で、尾沢が口を開き、控えめな声音で言った。

「あの……門倉さん。」

「……ん、何？」

「今回みたいな事件って……その……しよっちゅうあつたりするんですか？」

「んー、そんなには無いかな。大体みんな、そんなことしたら一瞬で色相濁っちゃうからやらないでしょ。……ま、私は13歳の時にもう潜在犯認定されちゃって、それ以来ずっと、檻の中だったからその恐怖心がどんなものなのか良く分からないけどね。」

少し悲しそうに言う門倉を見て、尾沢は直感的に地雷を踏んでしまったと感じた（まあ今のは対応のしようがなかったと言えなくはないが……）。

「……すみません。」

「何で謝るのよ。那奈ちゃんは悪くないわ。私が勝手に喋って自分で地雷踏んじやっただけなんだから。……ホラ、監視官なんだから、シヤキツとしなさい！」

門倉は先程とは打って変わって笑いながら、その赤い髪を揺らしながら、尾沢の背中を叩いた。

「……っ！はっ、はいっ！」

「……門倉、お前執行官なのに監視官に色々言い過ぎだし、あと背中を叩くな。またニシさんに怒られるぞ。」

今までだまって聞いていた笹木が言った。

「いーじゃんこれくらい。スキンシップだよスキンシップ！だよね、尾沢監視官!？」

「えっ……えっと……そうだと思います……」

「ホラ、那奈ちゃんもこう言ってることだし、大丈夫でしょ？」

「はあ……お前が何で潜在犯なのか、不思議でしょうがないよ。」

笹木は頭を押さえながら溜め息混じりに言った。

「それは私にも分かりません！シヴユラに聞いてくださーい。」

「あのなお前—— 『五階に到着しました』」

何か言いかけた笹木の言葉を遮るように、エレベーターのスピーカーが、五階に到着したことを告げた。

五階フロアは普通に電気がついていたが、店にあるものは

壊されていたりかき乱されていたりしており、尾沢たちの近くには壊れた警備ドローンが火花を散らしながら倒れていた。

「西ノ宮さん、尾沢です。五階に到着しました。これよりフロア内の搜索を開始します。」

『分かった。……俺たちも他フロアの民間人の避難が完了し次第、応援に向かう。くれぐれも、犯人を刺激し過ぎないように、注意してくれ。』

「了解しました。門倉さん、笹木さん。これよりフロア内の搜索を開始します。私と門倉さんが左回りで、笹木さんは右回りから搜索してください。」

このショッピングモールは、ドーナツのような円形をしており、右回りと左回りの両方から搜索していくのが、最も効率的なのである。

「……了解。じゃあ、お二人さん、またあとで。」

笹木はドミネーター片手に手を振りながら、さっさと立ち去ってしまった。

「……じゃ、私たちも行きましようか。」

「了解。」

尾沢と門倉もドミネーターを持ち、周囲を警戒しながら歩き始めた。

周囲を警戒しながら、尾沢が門倉に問いかけた。

「あの……門倉さん。さっきの話んだけど……答えなくなったら答えなくていいんだけどさ、潜在犯認定された時、どんな気持ちだった?」

「どんな気持ち……か。んー、『何で私なんだろ』とは思わなかったな……どっちかと言えば、『そろそろなるだろうな』って感じはしてたから、すんなり受け止めれたよ。」

「えっ……それって、どういこと?」

「私ね……中学生の頃、いじめられてたの。かなりひどくてね、あの頃はよくトイレで泣いてたものよ。……それで色相が悪化して、案の定犯罪係数が上昇し、潜在犯認定されたわ。」

「そんな……ならいじめてた人達は……」

「彼らが潜在犯落ちしたか、それは分からないわ。……でも、私の知る範囲ではまだ彼らの名前を見たことはないわ。」

「……なら——『お話し中失礼するよ。』」

会話中に、笹木からの通信が入ってきた。

「……どうしましたか?」

『服飾店内にて犯人を発見。人質を連れていますが、かなり気が狂ってるようだ。それに人質の犯罪係数もかなりヤバイ所まで上昇してる。……発砲の許可を。』

「発砲はまだしないでください。今から私と門倉さんがそちらに向かいます。それまで待っていてください。絶対に、犯人を刺激しないでください。」

『了解、待機します。』

通信が終了すると、尾沢と門倉は駆け出した。

\*\*\*\*\*

笹木のいる場所まで行くと、笹木がドミネーターを構えている先に、一人の男性が立っていた。

「落ち着いて、武器を捨てて投降しろ。今ならまだ更正の余地がある。」

「近づくんじゃねえ!そつちこそ武器を捨てやがれ!」

彼は片手にナイフを持ち、もう片方の手で女性を押さえつけ、笹木を牽制していた。

『犯罪係数、オーバー290、執行対象です。執行モード、ノンリーサル、パラライザー。慎重に照準を定め、対象を無力化してください。』

尾沢がドミネーターを構えると、ドミネーターからそう聞こえてきた。

「監視官、発砲の許可を。」

「撃たないでください!このままじゃ、人質も……」

「人質の犯罪係数を見てください。彼女も……もうダメです。」

人質の女性の犯罪係数を確認してみると、126と表示された。

つまり彼女も立派な潜在犯……すなわち執行対象なのである。

「そうであったとしても、彼女は被害者です！絶対に、巻き込ませないように、犯人を説得します。」

「……だが……っ、了解。」

笹木は苦々しそうな顔をしながら、尾沢の指示にしたがった。

どんな理由があつたとしても、執行官と監視官、当然監視官の指示に従うしかないのである。

「島原 安彦さんですね？……私は、公安局刑事課の尾沢です。どうか、落ち着いて武器を置いてください。じゃないと、これ以上犯罪係数が上がれば私は貴方を殺さなくちゃいけないから。だから……だからどうか、武器を置いて、人質を解放して。」

「うるせえ！公安局が！俺はなあ、あの仕事でミスさえしなけりや色相も濁らなかつたし、職だつて失わなかつたんだよ！それなのに……なの……」

「私はあなたの職場で何があつたかは知らないから、あなたがどれだけ苦労したかは分からない。……でもね、まだシヴユラはあなたを見捨ててはいない！まだやり直せるの！……だから、どうか武器を下ろして！」

「うるせえ！大体全部シヴユラがいけねえんだ！こいつさえなければ、俺はもっとキレイで幸せな生活ができたんだ！」

『……対象の脅威判定が、更新されました。犯罪係数、オーバー30。執行モード、リーサル、エリミネーター。慎重に照準を定め、対象を排除してください。』

尾沢のドミネーターが音を立てながら変形した。

エリミネーター。つまりは、島原 安彦という人物はシヴユラシステムに必要な人間と判断されたのである。

「お願いだから武器を捨てて投降して！このままじゃ……私はあなたを殺さなくちゃいけない……」

「黙れ！そつちこそドミネーターを捨てろ！こいつも巻き添えにする

ぞ！」

「やめてっ！助けてっ！」

島原は人質の女性を盾にするように尾沢たちの方へ向けた。

「やめなさい！そんなことをしても何の解決にもならない。あなたの問題に、彼女を巻き込まないで！」

「うるせえ！黙って大人しくドミネーターを捨てやが——」

彼は、最後まで言うことができなかった。

横に回り込んだ笹木がドミネーターを発砲、正確に島原の腕に命中させたのだ。

それによつて、彼の体はあり得ないまでに膨張し、破裂した。

脅威の排除が完了したとドミネーターが判断したのか、エリミネーターは解除され、モードはパラライザーに戻った。

「——っ！笹木執行官っ、発砲は許可していません！何故撃つたんですか！」

「あのままじゃ人質が持たないと判断したからです。それぐらい、尾沢監視官も分かっていたことじゃないですか？」

「だからと言って……彼女まで巻き込んでいいという理由は無いです！」

尾沢が指差した方には、血と内蔵が混ざった赤い液体をもろに浴び、怯えている女性がいた。

「それだったら彼女の犯罪係数を確認してみてください。彼女も立派な潜在犯です。巻き込んでも問題ないでしょ。」

そう言われ、女性にドミネーターを向けてみると、犯罪係数は150を越えていた。

「……でも……それでも……」

尾沢は反論することができない自分を悔しがりながら、それでも何か言おうとしたが、何も言い返すことはできなかった。

彼女も潜在犯であり、巻き込んでしまっても何ら問題はない。

そもそも、『彼女は潜在犯だけど、被害者だし、人質なのだから巻き込んでほしくない。』という偽善者の戯れ言など、現在執行官制度のもと彼らを管理……悪く言えば猟犬のごとく飼い慣らし、職務を全うし

ている尾沢には到底言うことはできないのだ。

「……それで、彼女はこうするんですか？ 犯罪係数規定値越えていますんで、発砲の許可を。」

「それは……」

考え込みながら、女性を見てみると、自分も執行されるといふのを悟ってしまった恐怖からか、後ずさっていた。

その目は、まるで救いを求めるかのように監視官である尾沢を見ていた。

それを見た尾沢は――

「発砲を……許可します。」

その指示を聞いた笹木が、すぐさま引き金を引いた。

刹那、ドミネーターから青白い光が発せられ、女性は気絶した。

その閉じた瞳からは、涙が流れていた――